

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 株式会社 AFI テクノロジー

研究開発課題 : リアルタイム“病原菌”センシングプラットフォームの研究開発

研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度

代表研究責任者 : 脇坂 嘉一

■ 総合評価 : 適

(評価点 16 点 / 25 点中)

(総論)

提案者のプロジェクト理解が高く、今年度の実験では目標を達成しており、平成 30 年度も引き続き研究開発を実施することが適当である。一方で、研究目標が達成されれば、市場性があり期待できるが、技術の最終的なブレイクスルーをどこに定めるのか、また、教師データの収集方法などについてさらなる検討が望まれる。

(コメント)

- 提案者のプロジェクト理解が高い。
- 今年度の実験の範囲では目標を達成している。
- 機械学習をさせる場合、実際に適用させる対象物を使って学習させていく必要があるが、実験した範囲が純化した対象物であるので、今回報告の実験の意義はあまり大きくない。目標が達成されれば、市場性があると思われる。
- 着実に進んでいるが、この技術(菌種別の判定、菌種が混じっていたときの判定)の最終的なブレイクスルーをどこに定めているのか、また、その時点で教師データなどはどのように集めるのか(集まっているのか)など、課題も残っている。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

現実的な方法・範囲で実施しており、今後につながる成果が出ている。

現状においても大きなニーズがあると思われるが、今後は更なる具体的な実用を定め、どのような形で提案するシステムを利用し、成果をあげるのかについて検討が必要になるとと思われる。

(コメント)

- 現実的な方法・範囲で実施しており、今後につながる成果が出ている。
- 着実に進んでいるが、具体的な実用を定め(病院なのか、食品工場なのか、今話題の給食センターなのか)、どのような形で提案するシステムを利用し、成果をあげる(例えば、判定できることが目的か、時間の短縮が目的か、利用の手軽さが目的か等のユーザ要求の定量的な評価等)のかについての検討が必要になるとと思われる。
- 大きなニーズがあると思料する。
- 取得データ数、外部手法の利用等を行っている。
- 菌種を2種類に絞り込んだものの画質が問題となって目標成果を得られていない。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

研究資金使用状況については、特に問題は無く、妥当である。

(コメント)

- 特に問題はない。
- 妥当である。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

今年度は目標を達成し、今後につながる成果が出ており、これからも良い成果が出れば、市場性があり期待できる。また取り組むべき方向は見えている。今後は、実用化に向け目標をどこにむけるのか、そこでの貢献はなにかについて、より具体的な対象を絞るべきかもしれない。

(コメント)

- システムの全体の中で AI が占める範囲はさほど大きくないが、良い成果が出れば、市場性があり、期待できる。
- 特に問題は無い。
- 取り組むべき方向が見えている。
- どこにむけるのか、そこでの貢献はなにかについて、より具体的な対象を絞るべきかもしれない。現状の報告では、病院で利用、食品工場で利用の二つにおいても、「短時間で簡易に判定」の時間短縮の良さや簡便さと実用における利便性は異なるように思われる。
- 平成 29 年度から先送りした内容に関して、実現するための明確な見通しが得られていない。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

- 予算計画は適切で、自己予算も活用しており、事業化へのハードルは低いと思われる。

(コメント)

- 自らの予算もはいており、事業化へのハードルは低い。
- 自己資金の利用も見据えている。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

開発に必要な協力企業は得ており、さらに多数の大学との協力関係を評価する。

(コメント)

- 多数の大学の協力関係を評価する。
- 開発に必要な協力企業は得ている。

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : (株)リモハブ、大阪大学
研究開発課題 : 革新的遠隔管理型心臓リハビリテーションシステムの研究開発
研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度
代表研究責任者 : 谷口 達典

■ 総合評価 : 適

(評価点 16 点 / 25 点中)

(総論)

リハビリテーションのリモート支援の可能性を感じさせる。着実に進んでおり、平成 30 年度も引き続き研究開発を実施することが適当である。一方で、ユーザ目線にたった製品デザインのための検討や、予測の高精度化のための外部有識者ヒアリングの実施が望ましい。

(コメント)

- 着実に進んでおり、リハビリテーションのリモート支援の可能性を感じさせる。一方で、リモート支援をするための器具の簡便さを患者の立場(高齢者が多いと思われる)から考える等についても検討すべきと思われる。
- 十分な精度が得られていないことに関して外部有識者の助言を聞く場を設けるべきである。
- 次年度の目標では、もう少し高いレベルの具体的な目標が欲しい。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

デバイスを用いた実験的な個人のデータ収集による解析は行われており、概ね計画通りに着実に進展している。バイタルデータを用いたディープラーニングによる「疲労」把握の仕組みを開発するなど、一定の成果は認められる。

(コメント)

- デバイスを用いた実験的な個人のデータ収集による解析は行われており、着実に進展している。ただ、心臓疾患のある人や高齢者など本システムの実際の対象となる人のデータは得られていないため、今後の具体的な利用を想定したリモート環境によるデータ収集状況によっては、データ収集とその利用可能性が想定と異なる可能性もある。
- おおむね計画通り進んでおり、70%の精度が得られているが、学習データを増やすことで精度が向上するかどうか定かでない。
- バイタルデータを用いたディープラーニングによる「疲労」把握の仕組みを開発するなど一定の成果は認められる。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

問題は見当たらず、適正な執行が行われている。

(コメント)

- 問題は見当たらない。
- 妥当である。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

市場ニーズはあると思われ、事業化に期待出来る。今後は、予測の高精度化及び具体的な利用を想定したデータ収集が課題となる。実際にユーザが利用しやすいシステムとなるよう、リハビリを積極的に行ってもらうための活動とあわせて実施する必要があり、費用対効果も考慮した方が良い。

(コメント)

- 市場ニーズはあると思われる。
- リハビリを積極的に行ってもらうための活動とあわせて実施する必要があり、また、器具の大きさや複雑さによっては費用対効果も検討しなくてはならないかもしれない。
- 「更にデータを集めて高精度化」のレベルに留まっている。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

特段の問題は見当たらず、妥当な計画である。

(コメント)

- 特段の問題は見当たらない。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

各分野の専門家が体制に含まれていることは評価できる。実際のサービスを意識し、リハビリ施設へのネットワークを持った企業の参画など、外部機関との連携を進めることが望ましい。

(コメント)

- 各分野の専門家が一通り揃っている一方で、外部有識者の意見を聞く場が設けられていない。
- 外部に向けてのアプローチ(器具があるのは、自宅なのか、ご近所の保険所なのかぐらいの選択はあってもよいかもしれない等)を検討し、当該研究機関以外でも連携(協力)可能な場を作るとリモートでのリハビリテーションの意義がより明確になる。
- リハビリ施設へのネットワークを持った企業の参加が望ましい。

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : ワイズ・リーディング(株)
研究開発課題 : 画像解析技術を用いた医療用高度 AI システムの研究開発
研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度
代表研究責任者 : 中山 善晴

■ 総合評価 : 適

(評価点 16 点 / 25 点中)

(総論)

この 1 年間、着実な成果を上げており、平成 30 年度も引き続き研究開発を実施することが適当である。一方で、類似の取り組みが各方面で行われていることにも留意して、総花的にならないで得意分野に注力しつつ、最終ゴールを明確に研究開発に取り組んでいくことが望まれる。

(コメント)

- 1年の成果は着実に成し遂げられており、得られた成果をどこに活かすかという観点で総花的にならず、どこの支援が最も効果的であるか(医師にとって効率よく支援されるとはなにか)について絞った検討をすとよい。
- 自社の強みを明確にすべき。
- 激しい競争環境の中で、何が強みであるのかが見えない。3 年間の間に達成出来ることを明確にして欲しい。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

当該年度の研究開発については、字句解析などで優れた成果をあげるなど、目標を上回って進められている。一方で、最終ゴールがやや曖昧である。

(コメント)

- 事前の計画どおりに進められている。特に多量のレポートによる字句解析などについては、かなりよい成果をあげている。
- おおむね計画通り進んでおり、目標をわずかに上回る性能を達成している。
- 研究開発の重要性は、明確である。
- 目標の設定が明確になっておらず、今回の実施内容が今後の研究にどの程度のベースになるのかが見えない。
- 最終ゴール(定量的評価を含む)がやや曖昧なままである。データ収集としては、現在のレポート中心でよいのかなどについても、医療の最新情報を反映して支援したいという本研究の目的に合致した検討が必要となる。新しい情報を精度の高い形で知識に加えるために何をすればよいかなど課題は多い。
- 機械学習の定量的データが出されていない。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

特段指摘すべき点はなく、適正な執行が行われている。

(コメント)

- 特に問題なし。
- 特段指摘すべき点はない。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

遠隔画像診断の機能向上としては妥当な取組みである。今後、総花的な研究開発ではなく、得意分野に注力して研究開発に取り組んでいくことが望まれる。

(コメント)

- 現行システム(遠隔画像診断)の機能向上策としては妥当な取組である。
- 今後、文章解析から画像解析への移行を計画している。
- 実現可能な目標を設定して取り組むべきである。
- もう一步踏みこんで、ある病気、ある部位に絞るなど、このプロジェクトだからこそできる独自性を明確にし、当該研究プロジェクトの強みを利用した取組みが望ましい。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

妥当な予算計画が組まれている。

(コメント)

- 概ね妥当である。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

遠隔画像診断サービスを事業として既に実施しているとともに、病院との連携がなされており、適切な実施体制が組まれている。一方で、AIの活用をより良く行うため、より充実した体制の構築が望まれる。

(コメント)

- すでに経験を積んでいるチームであり、病院との連携もよく、今までに得られている結果を活かす力はあると思われる。
- 計画通り進めて問題ないと思われる。
- 遠隔診断を既に事業として行っており、妥当性がある。
- AIを活用する観点では、体制はやや不十分かと思われる。
- データ提供社を増やすことが必要。

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 九州大学、(株)日立製作所
研究開発課題 : 快適生活を実現する見守りサービスの構築に向けた映像解析技術に関する研究開発
研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度
代表研究責任者 : 高野 茂

■ 総合評価 : 適

(評価点 15 点 / 25 点中)

(総論)

適切な実施体制で、今年度の目標を達成できており、概ね、計画通りの結果が得られている。一方、事業化への道筋が明確でない。

(コメント)

- 今年度の設定した目標は達成できており、概ね、期待した結果が得られている。
- システムが出来た場合の市場が見えており、実施体制も整っている。実行性は高いと考える。
- 学習に必要な質のよいデータをどのように手にいれるかについては、現在の研究内容からはあまり見えてこず、そこが実証事業として進めていくうえで大きな問題になる可能性が高い。
- テーマパークなどの適用場所毎に”出来ること”と”出来ないこと”を明確にして欲しい。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

今年度の研究開発では、計画通りの成果が出ている。一方で、本研究開発の成果を、実用化・事業化に具体的にどのように結びつけていくか、その道筋が明確でない。

(コメント)

- 現実的な範囲で成果をあげている。
- 見守りサービスに向けた映像解析技術、特に判定をする内容を4つに分けて実施しており、着実に進んでいると考えられる。
- 指摘事項に対応し、トライアルの評価という意味での目標は達成している。
- エキストラの“演出”の影響はあるが、一定の成果を上げている。
- 見守りの課題としてあげられている「不審者捜索」「回遊状況」に関しては実用に対して、かなり限定的な評価実験内容となっている。
- 不特定多数の中からではなく、シナリオベースの演技者による行動判定であり、実験データが十分でない。また、シナリオベースでの行動判定により非常に高い精度で得られているが、逆にかなり過学習になっていると考えられる。
- そもそも研究目的、応用に疑問が有り、目的を明確に定義する必要がある。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

特に問題はなく、適正な執行が行われている。

(コメント)

- 特に問題はない。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

ヒアリングを通じて成果展開への検討を行っている。一方で、本年度の研究開発の結果を見ると、実用化に向けてはさらなる検討が必要である。

(コメント)

- 目指していることの実現の可能性はあると思われる。
- 具体的な成果について、ヒアリングを行うことで、アウトカムへの検討をしており、ある程度実用への観点に対応されていると思われる。一方で、4つに分けた判別のうち、ヒアリングにおいても限られた判別手法が高評価を得ていることは、今後の実施において注意すべき点である。
- 本年度のトライアルの結果から見ると実用レベルの性能を得るためのハードルはかかなり高い。
- プライバシーに関するヒアリングを手厚く行うべきである。
- 出来ることのみを対象にしているように見える。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

妥当な予算計画が組まれている。

(コメント)

- 概ね妥当である。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

適切な実施体制が組まれている。

試験的な運用による部分的な社会実装の可能性はあるが、将来の本格的なサービス提供や事業展開の可能性については、さらなる検討が必要である。

(コメント)

- 実施体制が整っており、実行性が高い。
- 市場ニーズを把握する存在が弱いのが概ね妥当。
- 実施体制は、サービス体制のバックアップとして経験のある企業が連携しており、試験的な運用を「一部」実装しうる可能性は高い。一方で、本実証推進事業終了後に継続的にサービス提供、あるいは、そのための事業を積極的に行えるかは、大きな課題として検討すべきである。

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 静岡県立大学

研究開発課題 : 深層学習による点訳エンジンの研究開発

研究開発期間 : 平成 29 ~ 31 年度

代表研究責任者 : 石川 准

■ 総合評価 : 適

(評価点 15 点 / 25 点中)

(総論)

社会的には大変重要な課題であり、継続的な発展の可能性はある。ただ、精度には不安があり、使用する点訳エンジンの変更など見直しが必要な可能性がある。NICT などの既存の技術・有識者からの意見を効率よく取り入れるべきである。

(コメント)

- 社会的には大変重要な課題であり、早期の実現は望ましい。
- ある程度の成果が見込まれる。継続的な発展の可能性はある。
- 今後のアウトカムに向けて、機械点訳の精度をあげるためにも、自然言語処理の高精度なツール、機械翻訳の専門家による深層学習ツールの利用のノウハウなどを得ることで、より短時間での開発を目指すといわれる。
- 総務省では情報通信機構(NICT)において、自然言語処理チーム、機械翻訳チーム、音声チーム(点訳も重要であると同時に読み上げ支援もできる可能性を考えて)などが精度の高いシステム、ツールの開発を行っており、相談することを強く勧める。
- 既存の技術を効率よく利用することを検討すべき。
- 点訳データ入手方法をもう一度確立願いたい。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

視覚障害者のサポートシステムとして重要。研究方針の見直しを適宜行いながら着実に進んでおり、一定の点訳精度を得ている。一方で、漢字のひらがなへの変換部分で誤訳が多いなど、まだ精度に不安が見られる。

(コメント)

- 視覚障害者のサポートシステムとして重要。着実な開発が評価出来る。
- 一定の点訳精度を得ている。
- 想定外の障壁があったが、乗り越えようとする努力が見られる。
- 確実に進んでいるが、教師データの作成に時間がとられる等、機械学習ツールによる精度を検討する以前の部分において時間がかかっている部分もある。
- アドバイザリ委員会からのコメントを参考にするなどして研究方針の見直しを適宜行っている。本研究のポイントは分かち書き生成であるにもかかわらず、漢字→ひらがなの部分で誤訳が多い。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

概ね妥当である。レンタルサーバー上での Nvidia 社の GPU 使用禁止に対応した点は評価できる。

(コメント)

- レンタルサーバー上での Nvidia 社の GPU 使用禁止に対応した点を評価。
- 妥当である。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

自動点訳エンジンの開発を目指す具体的な計画がある点は評価できるが、一部精度に不安が見られ、また学習データの収集において教師データの作成に時間がとられる等、課題は多いと思われる。場合によっては、使用エンジンの変更など見直しが必要となる可能性がある。

(コメント)

- 現実的で着実な設定になっていることを評価。
- 自動点訳エンジンの開発を目指す具体的な計画がある。
- 成功した場合には多いに社会に貢献すると考えられるが、現状の精度では厳しいと感じる部分がある。
- 目標設定が明確であり、学習データの収集方法の戦略も考えられている。AIを活用した成果が期待できる。
- 漢字→ひらがなの部分で誤訳が多いことに対して使用エンジンの変更など見直しが必要となる可能性がある。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

特段問題は見当たらない。

(コメント)

- 特段問題は見当たらない。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

現時点では着実な成果を上げているが、精度に関する問題を解決するためにも、深層学習による機械翻訳、自然言語処理などの研究者が常時参加する体制とすべき。

(コメント)

- 深層学習による機械翻訳、自然言語処理などは多くの研究者がおり、少なからず、機械翻訳のための高精度なツール、自然言語処理を利用した音声ツールなど、多くの成果がでており、ぜひ、この分野の専門家と一緒に検討するとよいと考えられる。
- 自然言語解析の専門家、ディープラーニング環境整備の専門家の協力が得られると、現状の問題は解決できると思われる。
- アドバイザリ委員会はあるものの、深層学習に関する研究者が常時参加する体制とすべき。
- 事業会社の参画が望ましい。

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 兵庫県立大学

研究開発課題 : 人工知能・情報科学を用いたヒト不妊症のための新規超音波計測法の研究開発

研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度

代表研究責任者 : 畑 豊

■ 総合評価 : 適

(評価点 15 点 / 25 点中)

(総論)

非常に重要な課題であり、社会的ニーズは高く、実用化が期待される研究開発である。

ただ、人工知能以外の分野(医療、医学分野)の要素が研究の成否を決める上で大きすぎると思われる。また、本研究開発の最終ゴールでは部分的な実験構築までのように思え、現状では、実用化まで多くの時間を要する。

(コメント)

- 社会的ニーズは高く、実用化が期待される。
- 実現できれば素晴らしいが、実用化までかなり遠い印象を受ける。
- 今年度の実験範囲としているファントム実験は適切に実施されている。ただし、今年度の実験結果から、本プロジェクトの最終ゴールの実現可能性が見えてこない。
- 非常に重要な課題であり、意図、目的はよいが、医療、医学分野の要素が研究の成否を決める上でおおきすぎるくらいがある。人工知能としてのアプローチも、いきなり画像を教師データとする以前の部分での検討(患者の状態、年齢、画像データからえられる物理的な情報を利用した教師有機機械学習をいくつかトライアルする等)に加え、最終的な実施実装における人工知能アプローチ以外の部分での支援要素の検討などをこころみてほしい。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

人工知能(機械学習)の教師となる実データが不十分だが、概ね妥当な進捗状況である。ただ、本年度はあくまでも実験環境の中での実験結果のみであり、最終成果までの道のりは長い。

(コメント)

- AIの教師となる実データが不十分だが、概ね妥当。
- 高帯域フェーズドアレイや生体ファントムの納品が遅れているが、おおよそ計画通り進捗している。
- 目的の重要性は明確であるが、これからの成功を信じさせるデータが不足していることは否めない。
- あくまでも実験環境の中での適用が研究開発として検討されており、今回のヒアリングでも、医療という大きな壁もあり十分なデータを得る道のりは長いと考えられる。
- 今回はファントムを使った実験結果のみであり、目標設定と最終成果との間のギャップが大きい。
- 人工知能(機械学習)を利用する以前の要素が大きく研究目標を左右する可能性が大きい。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

研究資金使用状況については、特に問題は無い。本来、大規模にデータ収集を図るのであれば、提携する病院などを増やす必要があるが、現在の予算では限界がある可能性がある。

(コメント)

- 特に問題ない。
- 本来、大規模にデータ収集を図るのであれば、提携する病院などを増やさなければならないが、現在の予算では限界があるかもしれない。
- 学習データが十分に得られる見通しがたっていないと思われる。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

大変重要な研究であり、クリニックとの連携による大量データ収集の仕組みに取り組んでいる。ただ、実用化に到達するためには、データの収集や利用する機械学習、そしてその検証等、多くのハードルが存在するので、長期的に検討してほしい。

(コメント)

- クリニックとの連携による大量データ収集の仕組みに取り組んでいる。
- この数年で実用化にたどりつく可能性はデータの収集や利用する機械学習、そしてその検証をどのような形であるかなど、大きなハードルが存在している。
- 大変重要な研究ではあるが、一方で先が長い研究である(本当の成果をどこに求めるかにもよるが、当該研究による不妊症診断に対する支援効果などの数字を求めるのは現段階では無理)ので、他分野からの研究資金なども視野にいれて長期的に検討してほしい。
- 学習データが十分に得られる見通しが立っていないように思われる。
- 学習データを取得するための体制が十分ではない。
- とにかく今後はデータの収集を重視すべき。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

予算計画は、妥当なものとなっている。ただ、数年で実用化に到達するような研究開発ではないため、部分的な実験構築で終わることを想定しているように見受けられる。

(コメント)

- 妥当である。
- 部分的な実験構築で終わることを想定しているように見受けられる。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

各大学との協力体制があることは評価出来る。

今後は、学習データを得るための体制を整える必要があるが、全国的なデータ収集体制、標準的な診断支援手法を確立するには現在の実施体制では厳しいと思われる。

(コメント)

- 各大学との協力体制があることは評価出来る。
- 装置メーカーの早期参画が望まれる。
- 学習データを得るための体制が十分ではない。
- 全国的なデータ収集体制、標準的な診断支援手法を確立するには現在の実施体制では厳しいかもしれない。